

看護学生が中等度・重度痴呆性老人を理解する過程

渡辺みどり, 小林陽子

本研究は、臨床実習において看護学生が中等度・重度痴呆性老人を理解する過程を明らかにすることを目的とした。学生が実習期間中に毎日、記録用紙の評価欄から痴呆性老人とケアについて判断記述を内容分析し、各カテゴリーに属する記述内容の数と学生数を経時的に検討した。

記述 280 から、サブカテゴリー 30, カテゴリー 7【機能のアセスメントをする】【機能にあった生活の援助をする】【コミュニケーションを工夫する】【言動の解釈と気持ちを推測する】【気持ちを尊重して援助する】【状況を整え力を引き出す】【生活史に結びつけて言動を洞察する】が抽出された。看護学生は、実習初期には、機能に着目して援助し、対象との関係を築こうとする。次に言語的・非言語的コミュニケーションを工夫した上で、対象の気持ちの把握してそれに則して援助する。最終的には対象の心を洞察し、対象の持つ力を引き出そうとしていた。

キーワード： 看護学生, 中等度・重度痴呆性老人, 臨床実習。

1 はじめに

痴呆性老人に関する研究は、痴呆性老人を対象とした研究^{1)~3)}、痴呆性老人とケア提供者との関係に着目した研究^{4), 5)}、痴呆性老人と介護者関係に着目した研究^{6)~8)}などがある。

天津らは老人保健施設における痴呆性高齢者とケアスタッフの相互作用に見られるずれに着目し、集団ケア・個別ケアおよび看護職・介護職による相違があることを報告し、堀口は痴呆性老人に接する時に感じる援助者の困難感がどのように処理されていくのかという点から検討し、困難感を感じなくなるといった結果に至った処理パターンは「困難と感じた状況が解決される」「困難の捉え方が変わる」の2パターンに分けられる⁹⁾ことを報告した。

堀口は痴呆と判断された高齢患者の言動をパターンに対する看護者の認識過程に注目し、看護者が認識しようとしていたのは患者の意思であり、【患者の意思の探索】は看護者が高齢患者と関わる上での中心的な概念であった⁹⁾と報告している。また永田は、痴呆性老人は、自分からうまく意思を伝える事が次第にむずかしくなるが、その状態でありながらも本人がいかに安心して意思のサインを出してもらおうか、看護者がそれがいかに気づき、本当は何を伝えたがっているのか、その意味を洞察し読み解く事ができるか、その一連のプロセスが支援の要となる¹⁰⁾ことを指摘している。このように看護者・介護者が痴呆性老人をどのように理解していくべきであるのかということが近年追及されてきた。しかし、痴呆性老人へのケア経験をした看護学生の研究は少なく、Cherylが痴呆性老人のケア体験を通して看護学生は、フラストレーション、悲しみ、恐怖、感情移入などの多様な感情を持ち、痴呆性老人へのケアを克服しようと多様なアプローチをしていた¹¹⁾ことを報告している。

痴呆性老人の看護は看護基礎教育課程において位置づ

けられ、本学科老人看護学実習においても何人かの学生が痴呆性老人を受け持ってきた。しかし、学生が痴呆性老人と関わるなかで患者をどのように理解をしていくのかは明確にはできていない。学生が臨床実習において痴呆性老人の理解を深めていく過程を把握し、今後の臨床実習指導への示唆を得たいと考えた。以上から、本研究は臨床実習において看護学生は中等度・重度痴呆性老人を理解する過程を明らかにすることを目的とした。

2 研究方法

1) 対象学生の選定

2001年10~12月に老人看護学実習において研究者自身により実習指導を受け、同一の実習病棟(K病院療養型病棟)において痴呆性老人を受け持った本学科3年次学生11名を選定した。

2) データの収集と分析

学生が実習期間中に毎日、ケアの実施・結果・評価について記載する記録用紙の評価欄から痴呆性老人とケアについての判断記述を抽出した。分析は内容分析を行なった。記述内容を1単位としてコード化し、意味内容の性質の類似性と相違性により分離・統合し、サブカテゴリーとした。同様の手順で抽象度を高めながらカテゴリーを命名した。

また各カテゴリー属する記述内容を時系列に配列し、記述数のカテゴリーに占める割合および記述した学生の割合とその時期を検討した。

一連の分析は老人看護学実習指導経験3年・5年の教員2名で合議して行なった。合議の際には必要に応じ学生の実習場面・受け持ち患者に関する情報を補った。

3) 研究への同意

11名の学生に研究の主旨、研究協力によって教育評価は影響されないこと、本研究の目的以外に得られた情報を使用しないこと、個人が特定される表現を用いないことを個別に説明して同意を得た。

3 結果

1) 受け持ち患者の概要

11名の学生の受け持ち患者の概要を表1に示す。軽度痴呆のものはなく、全ての受け持ち患者が女性で、中等度・重度痴呆性老人であった。

2) 痴呆性老人及びそのケアに関する学生の記述

学生11名の記録から抽出された患者と患者のケアに関する記述数は280であり、サブカテゴリー30からカテゴリー7が抽出された。抽出された7カテゴリーは、【機能をアセスメントする】【機能に則した生活の援助をする】【コミュニケーションを工夫する】【言動を解釈し気持ちを推測する】【気持ちを尊重して援助を行なう】【状況を整えられる力を引き出す】【生活史に結びつけて言動を読む】である。カテゴリーを構成したサブカテゴリーの内容とそれに属する記述数を表2に示す。また、カテゴリー別の記述数の割合の実習日による変化を図1に、記述した学生の割合の実習日による変化を図2に示す。以下、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを『 』で示す。

①【機能をアセスメントする】

学生が患者の身体機能・認知機能についてアセスメントしたものであった。表2に示した『食の機能をアセスメントする』『排泄の機能をアセスメントする』『認知・知覚コミュニケーションの機能をアセスメントする』『移動の機能をアセスメントする』『清潔行動の機能をアセスメントする』から構成されておりこの中でも『認知・知覚コミュニケーションの機能をアセスメントする』が最も多く32記述が見られた。具体的には「色を識別し表現する事ができる」「もっと欲しいという自分の欲求を言語化できる」である。

このカテゴリーの記述は図1のごとく、実習1-2日目に最も多く、実習日を重ねるごとに記述数は低下した。しかし、記述した記述した学生の割合は図2のごとく、3-8日目まで半数以上の学生が記述していた。

②【機能に則した生活の援助をする】

患者の機能評価に基づいて援助した後の記述であり、具体的な援助方法に関する判断記述である。『機能にあった食の援助をする』『機能にあった排泄の援助をする』『機能にあった移動の援助をする』『機能を考慮して活動性を高める援助をする』から構成された。食に関する援助記述が最も多く、具体的には食事の動作や嚥下機能に関するものがみられた。『機能を考慮して活動性を高める援助をする』では、「覚醒が悪い時には車椅子に移動し座位時間を増やし、肩をたたく、手を握るなどの刺激を加えると覚醒する」「夜間の睡眠時間に影響のない程度の午睡は、自発性や活動性を高め、精神状態を安定させる」と睡眠と活動性に関する記述がみられた。

このカテゴリーに属する記述は実習3-6日目に多く、実習後半には減少した(図1)。記述した学生の割合も実習1-4日目に多く、その後減少した(図2)。

③【コミュニケーションを工夫する】

患者の認知機能に基づいて、言語的・非言語的コミュニケーション方法について判断した記述である。『わかるような話しかけ方を工夫する』『聞き方・答え方を工夫する』『言葉・内容を選ぶ』『時間帯を選ぶ』から構成された。『時間帯を選ぶ』を記述した学生の受け持ち患者は、認知機能に日内変動がみられていた。

このカテゴリーに属する記述は、実習初期から徐々に増え実習5-6日目までに多く(図1)、記述した学生の割合も実習初期から5-6日目頃に多くその後低下した(図2)。

④【言動を解釈し気持ちを推測する】

言語的コミュニケーションの成立しにくい中等度・重度痴呆性老人の言葉や表情、しぐさから患者の気持ちを援助者の立場から推理・推察、時に援助をしつつ確認するものである。『不安・安心な気持ちを推測する』『快・不快な言動を解釈する』『意向・関心をつかむ』『孤独感を察する』『羞恥心に気づく』で構成された。

表1. 受け持ち患者の概要

受け持った学生数	患者	年齢	性別	痴呆の程度	介助レベル	患者の特徴
学生3名	A	88	女	重度痴呆 (脳血管性)	食事摂取のみ誘導・見守り、 他全面介助	時々コミュニケーションが成立する。 入浴、腹臥位療法、褥創部の処置など受け入れがたいケア場面では「死んでしまったほうがいいです。」としばしば泣く。
学生2名	B	86	女	重度痴呆 (アルツハイマー)	食事摂取のみ誘導・見守り、 他全面介助	幻覚あり。方法により言語的コミュニケーション時々成立する。
学生2名	C	88	女	重度痴呆 (脳血管性)	全面介助	睡眠覚醒障害(概日リズムの障害)あり、2~3日周期で繰返す。覚醒時に時として会話の内容により言語的コミュニケーション成立する。
学生2名	D	85	女	中等度痴呆 (脳血管性)	誘導・見守りと部分的介助	興奮して叫ぶ事が多い、時として他者に攻撃的な行為あり。
学生1名	E	90	女	重度痴呆 (脳血管性)	誘導・見守りと部分的介助	昼夜を通して独語あり、時々拒食あり。
学生1名	F	81	女	中等度痴呆 (アルツハイマー)	誘導・見守り	著しい即時記憶の障害、見当識の障害があり。徘徊頻繁にあり、しばしば所在不明となる。

表 2. 抽出されたカテゴリーとサブカテゴリー

カテゴリー(7)	サブカテゴリー(30)	記述数(280)
機能を アセスメントする (25.7%)	食の機能をアセスメントする	16
	排泄の機能をアセスメントする	11
	認知・知覚・コミュニケーション能力をアセスメントする	34
	移動の機能をアセスメントする	5
	清潔行動の機能をアセスメントする	6
機能に即した 生活の援助をする (10.4%)	機能にあった食の援助をする	13
	機能にあった排泄の援助をする	8
	機能にあった清潔の援助をする	4
	機能にあった移動の援助をする	1
	機能を考慮して活動性を高める援助をする	3
コミュニケーションを 工夫する (8.2%)	わかるような話かけ方を工夫する	12
	聞き方・答え方を工夫する	5
	言葉・内容を考慮する	5
	時間帯を選ぶ	1
言動を解釈し 気持ちを推測する (36.1%)	不安・安心な気持ちを推測する	30
	快・不快な言動を解釈する	37
	意向・関心をつかむ	28
	孤独感を察する	3
	羞恥心に気づく	3
気持ちを 尊重して援助を行なう (11.1%)	対象の気持ちが落ち着いてから援助をする	12
	わかるように説明してから援助する	15
	意向・意思を取り入れた援助をする	4
状況を整え できる力を引き出す (6.4%)	楽しめるようにする	5
	自信が持てるようにする	1
	言葉を引き出す	2
	動作を引き出す	5
	意思・意欲を引き出す	5
生活史と結びつけて 言動を読む (2.1%)	戦争体験と関連させて言動を読む	1
	過去のなじみのあるものに着目して会話し気持ちを推測する	2
	過去の生活習慣・役割関係から言動を読む	3

このカテゴリーに属する記述は実習初期から見られたものの実習5-6日目~7-8日目に増加し(図1), 記述した学生の割合も3-4日目~7-8日目には80%以上の学生が記述していた(図2)。

⑤【気持ちを尊重して援助を行なう】

患者の言動により確認や解釈された気持ちに則して援助すること示している。『患者の気持ちが落ち着いてから援助をする』『わかるように説明してから援助する』『意向・意思を取り入れた援助をする』から構成された。『意向・意思を取り入れた援助をする』には「患者が好きなレクリエーションを提示し、患者の選択したものを行なう」「患者が好む場所に行く」などの記述がみられた。

このカテゴリーに属する記述は、実習7-10日目に多く(図1), 記述した学生の割合も7-10日目に多かった(図2)。

⑥【状況を整えできる力を引き出す】

痴呆性老人が混乱・興奮しない安定した精神状態が保てる環境を整えつつ、患者の能力が最大限に引き出されることを目標とした援助である。『楽しめるようにする』『自信が持てるようにする』『言葉を引き出す』『動作を引き出す』『意思・意欲を引き出す』から構成された。

このカテゴリーに属する記述は、実習初期から行なわれたが最も多くは7-8日目に記述され(図1), 記述した学生の割合も初期から徐々に増加し7-8日目には最も多く、約70%の学生が記述していた(図2)。

⑦【生活史に結びつけて言動を読む】

受け持ち患者の幼少期から老年期に至るまでのいくつかの情報と現在の患者の言動との文脈を読みつつ、直面した患者の言動を洞察したものである。『戦争体験と関連させて言動を読む』『過去のなじみのあるものに着目して会話し、気持ちを推測する』『過去の生活習慣・役割から言動を読む』から構成された。『過去の生活習慣・役割関係から言動を読む』に属する具体的な記述は「一人暮らしのとき飼っていた猫をかわいがっていたつもりで、人形に愛着し話しかけている」「早朝の徘徊は、農家の主婦として家族の朝食を作らなくてはいけないことを心配して台所を探しているようだ」などである。

このカテゴリーに属する記述は、3日目以降に出現し、7-8日目に最も多く(図1), 記述した学生の割合も7-8日目に最も多かった(図2)。

4 考察

(1) 看護学生が痴呆性老人を理解する過程

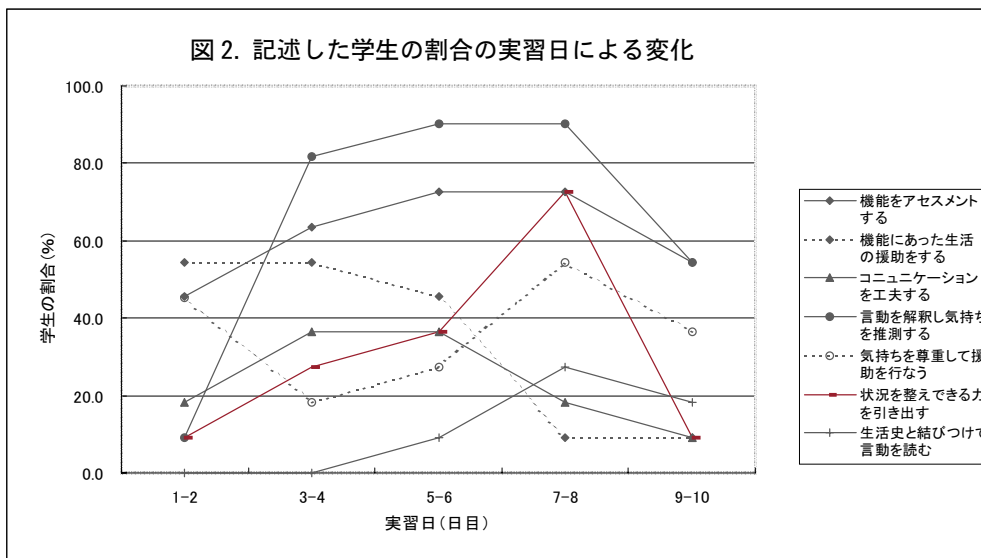
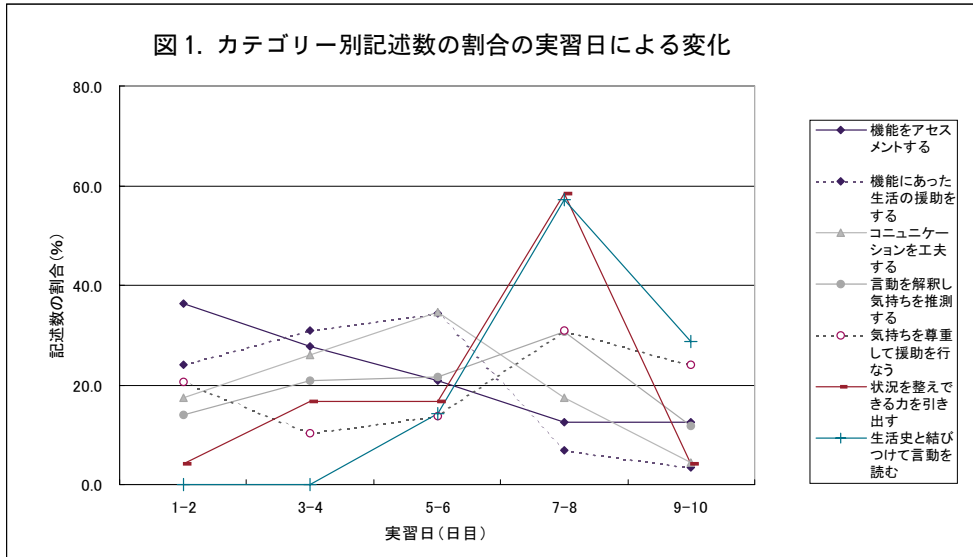
看護学生が痴呆性を老人理解する過程について、初期(実習初日-3日目)、実習中期(4-6日目)、後期(7-10日目)の各時期ごとに抽出されたカテゴリーに基づいて検討する。

① 実習初期の特徴

看護学生は初期には、患者の【機能をアセスメントする】。ことに、受け持ち患者が痴呆を有するため「認知・知覚コミュニケーション」については多くの判断記述をすると同時に受け持ち患者の機能評価に基づいて【機能に即した生活の援助をする】。その一方で患者と信頼関係を築こうと、言語コミュニケーションの成立しにくい中等度・重度痴呆の患者との【コミュニケーションを工夫する】。これら3つのカテゴリーに属する記述が多いことが初期の特徴である。これらの【機能をアセスメントする】【機能に即した生活の援助をする】【コミュニケーションを工夫する】は痴呆性老人のみならず、様々な人を患者とした看護の共通の構成要素であり、看護学生は看護共通の基盤に着目して学び始める傾向にある。

② 実習中期の特徴

看護学生は実習の進展に伴い患者の言語的コミュニケーション能力の限界をつかむ。患者の【機能に即した生活の援助をする】、患者との【コミュニケーションを工夫する】を行ないつつも、痴呆性老人への個別的な看護に不可欠な【言動を解釈し気持ちを推測する】【気持ちを尊重して援助を行なう】ことへ、即ち患者の身体機能に着目した看護から個別の気持ち・心理状態に着目した看護



護へ学びは進展する。沼本は、看護ケアの現場では特に医療ニーズの高い人ほど身体に関する現在の情報の重要性が高く、その一方で看護ケアの現場での生活が長期化した高齢者、施設で人生の最後の生活を送っている高齢者に関して言えばむしろ現在の生活全般に関する情報や心理状態、現在の生活における人間関係のあり方などの非身体に関する情報が重要になる¹⁹⁾としている。本研究において、学生の判断記述がこの時期に身体的機能から心理的側面へと判断記述数が多くなっていった。学生は疾患に応じた標準的な看護過程の展開を基盤にしつつも、個別の痴呆性老人を理解するために必要な非言語的コミュニケーション方法を探究し、患者との相互作用によって生まれる固有の関係の中で、表情・しぐさから【言動を解釈し気持ちを推測する】【気持ちを尊重した援助を行なう】へと患者理解を進展させていったと考えられる。

坂口は医療機関に入院中の痴呆性老人の言動パターンへの看護者の認識過程は、患者の【意思の模索】という

概念で表わされ、意思を探索する具体的方法として〈指示への意思の見極め〉〈不快の見積もり〉〈意思決定の把握〉〈内的体験の把握〉の4つの局面を通して行なわれる⁹⁾としており、本研究で導かれた【言動を解釈し気持ちを推測する】というカテゴリーとの共通点が見られる。坂口の〈指示への意思の見極め〉〈意思決定の把握〉〈内的体験の把握〉の局面は、本研究においては、『意向・関心をつかむ』にとどまり、学生の痴呆性老人の看護の経験の少なさ、入院対象を病状安定期にあり医療ニーズの比較的少ない者としている療養型病床群において実習していることなどが影響していると考えられる。

③実習後期の特徴

実習後期には【気持ちを尊重した援助を行なう】【状況を整えてできる力を引き出す】【生活史と結びつけて言動を読む】の記述割合が多い。この3カテゴリーの記述割合が高まるのがこの時期の特徴である。永田は痴呆性老人への看護者の役割として最も大切なのは、見極め

に先立つ状況性や相互作用の在り方をこそ問い直し、本人が自己決定の力を最大限に発揮して最善の決定ができるように働きかけていくことであるとした上で、痴呆性老人の自己決定の力を引き出すケアの技法として意思を伝えあうチャンネルをつくる、意思を発動させる素地をつくる、痴呆の特性を生かして自然な自己決定を喚起する、インフォームド・コンセントに基づく自己決定の支援について述べ、患者の意思の発動のために、生体リズムや生活リズムが安定し穏やかさと安らかさが確保された状態のベースラインに整えること、痴呆性老人が混乱し消え入りがちな自己を支え希望を維持していくために希望を感じ取れる環境と体験を生み出すことの重要性について指摘している¹⁰⁾。本研究で実習中期に出現・増加し、実習後期において特徴的なカテゴリーとなった痴呆性老人の【状況を整える力を引き出す】は、『自信がもてるようにする』『意思・意欲を引き出す』などの構成要素を含んでおり、この点で、永田が、痴呆性老人の意思の発動のために重要であると指摘した内容に共通性が見出され、痴呆性老人の主體的な意思を導くという看護の重要な要素が臨床実習において学生に学び得られていることが確認された。

【生活史と結び付けて言動を読む】は【言動を解釈し気持ちを推測する】という直面した状況では、理解しがたい患者の言動を痴呆性老人の暮らしの歴史を手がかりにしながその人の本質を見出そうとする過程から生み出される。諏訪は痴呆性老人の言動の意味を分析し、見出された【痴呆性高齢者の時間性】と【痴呆性高齢者のケアリング】という構成概念を導き、この概念は人間のありようそのものであり様々な症状にとらわれることなく、人間としての痴呆性老人のありのまま、即ち本質を捉えていくものでありそのケアが重要である¹³⁾としている。この点で、理解しがたい患者の言動に直面し試行錯誤しながらも、人としての本質を捉えようとした【生活史と結び付けて言動を読む】が、学生の臨床実習に見られたことの意義は大きいと考えられた。

(2) 臨床実習指導への示唆

学生は臨床実習という限られた期間のなかで、看護共通の基盤に、患者の身体・精神機能に着目して援助をはじめ、関係を築こうと言語的・非言語的コミュニケーションを工夫し、患者の気持ちを把握しようとしそれに則して援助展開し、患者の心を深く洞察し、患者の持つ力を引き出す援助を構築していた。これら一連の過程は学生と患者の痴呆性老人との相互作用と臨床実習指導者と学生の相互作用の中で進展していく。臨床実習指導者はこの過程の進展を促進する役割を担うことが必要である。したがって臨床実習指導者は、学生が痴呆性老人をどのように捉えているかを把握し、痴呆性老人の代弁者としての看護者の役割が学べるよう、人としての本質を学生が痴呆性老人のなかに見出せるよう学生を支える事が重要と考えられる。

Cherylは痴呆性老人のケアを体験した学生に、フラストレーション、悲しみ、恐怖、感情移入などの多様な感情が生じる¹¹⁾ことを報告している。学生がこのような

感情を持ち、臨床指導者にそれを表現することは、起こりうる。臨床実習指導者は、学生のこのような感情が解決されつつ、学生の痴呆性老人への理解が発展することを指導目標とする必要があると考えられた。

本研究の限界と今後の課題

本研究のデータは同一の病棟で、同一の指導者によって臨床実習指導を受け、痴呆性老人を受け持った学生の記録から得たために、11名の学生記録という限局したデータにとどまった。学生数を拡大し、より多くのデータから学生の痴呆性老人の理解する過程を詳細にしていくこと、療養型病棟以外で療養・生活する痴呆性老人を学生がどのように理解していくかなどの検討も加えていく必要がある。

また教員のどのよう介入が学生の痴呆性老人の理解を促進するのか、その方法を具体的にしていくことが必要である。

文 献

- 1) 小泉美佐子,大塚理香,灘波悦子,加藤典子 (1996) 施設に入居した痴呆老人の徘徊行動の分析. 看護研究 29(3): 43-51
- 2) 北川公子,中島紀恵子,竹田恵子 (1997) 痴呆性老人の転倒と障害の進行に関する研究. 老年看護学, 21): 79-86.
- 3) 阿呆順子 (1999) 痴呆老人がとる微小な行動の意味に関する考察. 看護研究, 32(5): 1999.
- 4) 前場幸登,進藤由美架,原田和子, 他 (1998) 徘徊多動を呈する痴呆患者のケア. 看護研究, 31(4): 73-84.
- 5) 天津栄子,中田まゆみ (1998) 老人保健施設における痴呆性老人とケアスタッフの相互作用にみられる特徴. 老年看護学, 3(1): 52-63.
- 6) 山本則子 (1995) 痴呆老人の家族介護に関する研究. 看護研究, 28: 178-199, 313-333, 409-427, 481-500.
- 7) 諏訪さゆり, 湯浅美千代, 正木治恵, 他 (1996) 痴呆性老人の家族看護の発展過程, 29(3): 31-42.
- 8) 太田喜久子 (1996) 痴呆性老人と介護者の過程における相互作用の構造. 看護研究, 29(1), 71-82.
- 9) 坂口千鶴 (2002) 痴呆と判断される高齢患者の言動パターンへの看護者の認識過程. 日本赤十字看護学会誌, 2(1), 50-60.
- 10) 永田久美子 (1997) 痴呆のある高齢の人々の自己決定を支える看護. 老年看護学, 2(1), 17-24.
- 11) Cheryl Tatano Beck (1996) Nursing students' experiences caring for cognitively impaired elderly people. 23, 992-998.
- 12) 沼本教子, 水谷信子, 竹崎久美子編著 (2001) 老人看護学. 建帛社, 東京, 10-13.
- 13) 諏訪さゆり, 吉尾千世子, 瀧断子, 他 (2001) 痴呆性高齢者の言動の意味の分析. 東京女子医科大学看護学部紀要, 4, 11-18.

Abstract**The process for nursing students to understand the elderly
with moderate to severe dementia****WATANABE Midori and KOBAYASHI Yoko**

The purpose of this study is to clarify the process in which the nursing students understand the elderly with moderate to severe dementia in clinical practicum. The student's records about the care for the patient and the patient was examined by content analysis. Furthermore, we reviewed the number of each category description contents to belong to student with time.

From the 280 descriptions, 30 sub-categories, and 7 categories: **【function assessment】**, **【assistance in daily living according to functions】**, **【consideration in communications】**, **【interpretation of words and actions and speculation on feelings】**, **【assistance with respect to feelings】** **【arranging the situation and drawing out abilities】** and **【insight on words and actions connected to life history】** were picked out.

The nursing students tried to give assistance with attention to functions, based on a common nursing foundation in early stages.

Secondly they grasped the feelings of the care receivers by making considerations in verbal and nonverbal communication in order to build relationships with the care receivers. And they gave assistance according to the grasped feelings.

At last they saw through the minds of the care receivers, and assisted them so as to draw out their abilities.

Key words : Nursing student, The elderly with moderate to severe dementia, Clinical practicum.